

論文

近親者の自殺、意味秩序の再構築、動機の語彙

藤原 信行*

1. はじめに

本稿の目的は、意味ある他者¹の自殺により動揺する意味秩序を、遺族らがさまざまな動機の語彙を駆使して（もしくはしないで）修復ないしは再構築する（もしくはしないで）＜技法＞の一端とその困難を、遺族らの語り に即したかたちで記述し、かつそれにより明らかになった特徴的な現象を分析することである。

死別経験にかんする遺された者たちによる意味づけと、その変容および再構築が社会的に注目を集め、調査研究も蓄積されつつある。それらは死別経験を、生活世界の根源的崩壊（水津 2001：215-7）、これまでの自己物語を機能不全に陥らせる危機的状況（鷹田 2003：175）、ないしは日常生活に不連続性をもたらすライフイベント（浅利 2004：78）と捉え、遺された者たちの意味づけの再構築、およびそれによる言動の変容の過程に着目している。また先行諸研究では、セルフヘルプグループに所属する死別経験者の語りに着目し、それが死別経験の意味づけなどの語りの変容に果たす役割の解明を志向している。だが、そのような集団とかわりのない死別経験者による死別経験の意味づけ（とその変容）にかんする研究はほとんどない。

さらに近年、「自殺対策基本法」制定に象徴されるように自殺現象への社会的関心が高まり、遺族への支援の必要性が認識されつつある。自殺研究全般にたいして関心が低かった社会学領域²でも、自死遺族の死別経験およびその語りの変容にかんする研究が散見されるようになった（副田 2001; 時岡 2003a; 2003b）。それらの価値ある研究は、上述の死別一般の諸研究と同様の着眼点・特徴・問題点を有するが、自死（自殺）による死別経験とほかの死因によるそれとの相違を指摘している点において独自の意義を有する。ひとくちに死といっても、死因や死にいたる経緯により異なる社会的な意味付与がなされ、死別経験も質的に異なる（時岡 2003b：84）。自殺は死者自らが選び取った死として、不可避な死と定義される他の死因からは区別される（時岡 2003a：122）。選び取った死——すなわちそれは本人や周囲のあり方いかんで予防できたかもしれない——という社会的な定義づけは、遺された者たちを自責の念や罪悪感でより強く苦しめる（副田 2001：204-5）。

そればかりでなく、自殺にたいする選び取った死＝回避可能な死という社会的定義は、動揺する意味秩序を修復ないしは再構築する作業にも困難をもたらす。

2. 近親者の自殺——遺された者たちの＜意味秩序＞の危機として——

（1）近親者の死と意味秩序の動揺

選び取った死＝回避可能な死という自殺の社会的定義は、なぜ意味秩序の修復・再構築を困難にするのだろうか。それは、意味秩序の成り立ちそのものにかかわる問題である。本項ではP・バーガーの所説を参照しながらそのことについて論ずる。

意味秩序とは、人々を意味喪失の危険から護ることにより、彼／彼女らの自明なりアリティとアイデンティティを保証する装置である（Berger 1967=1979：33）。だが意味秩序は常に限界状況——リアリティとアイデンティティの自明さを覆す事態——を引き起こすカオスの強大な力にさらされるなかで辛うじて存立しているに過ぎない（Berger 1967=1979：33-6）。その最たるものが死である。なぜならば、意味秩序は社会的な言説を媒介とした他者

キーワード：自殺、遺族、意味秩序、動機の語彙

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2006年度入学 公共領域

との相互作用、とりわけ意味ある他者たちとの不断の相互作用とその（再）解釈をつうじて（再）構築されている。ゆえにそのような他者の死は、（再）構築に不可欠な相互作用の消失ないしは破壊にほかならない（Berger 1967=1979：23-5）。だが人はいつか死ぬという現実から逃れることもできない。したがって意味秩序存立のため、それを脅威にさらず限界状況、とりわけ死を正当化（無害化）すること——人々にそれらを自明のこととして了解させる語彙を用意すること——が不可欠となる（Berger 1967=1979：65-6; 89-90）。

以上の議論からすれば、もし本当に自殺が選び取った死であるならば、それは意味秩序を脅かす限界状況の最たるものである死をあえてひきおこすことにほかならない。また遺された者たちの立場からすれば彼／彼女の自殺は、本当にそれが選び取った死であるならば、自明な意味秩序の共同構築作業、およびその結果としての秩序そのものを拒否する行為——自明な意味秩序への異議申し立て——にほかならない。

よって自殺は、あらゆる死の中でもっとも意味秩序を脅かすものの一つである。ゆえにその死が選び取った死であるという社会的定義に対抗し、別様な意味を付与（＝無害化）して意味秩序の修復・再構築を可能にする「動機の語彙」の適用による意味秩序の再構築が不可欠となる。

（２）動機の語彙と意味秩序の二つの水準

「動機の語彙」とはなにか。それは、ある行為の正当性を自他に対して受容させ、かつそれを理解可能とするために、事後的に言及・適用される類型的な語彙としての動機であり、動機を個々人の心理・精神の奥底に蠢く行為の駆動因と見なす通俗的理解および心理学的理解とは別様な動機の社会学的分析を可能とするものである（Gerth & Mills 1953=1970：127-44; Mills 1963=1971：344-55）。そしてミルズらはそれが有する特徴を以下のように指摘している；①予期されない状況が生じたときや選択肢が複数あるなど、他者の行為の理解や自己の行為の正当化が求められる「危機」的状況において必要性が増す（Gerth & Mills 1953=1970：130）、②ある特定の時代・場所において知識として流通し受容されるもののみ使用可能である（Gerth & Mills 1953=1970：130-1）、③前述の使用可能な語彙の制約を媒介として、人々の行為に対する意味づけ、理解、さらには言動そのものを統制——適切な語彙を付与できる言動を促進し、できない言動を抑制——する（Gerth & Mills 1953=1970：132-3; Mills 1963=1971：348-52）。

このような動機の語彙の適用により再構築される意味秩序であるが、それは密接不可分だが分析上区別する必要がある二つの水準を有する。井上俊によれば、それはa) 善悪、利害、そしてそれらにもとづく行為の責任の宛先にかかわる「規範的秩序」の水準と、b) 事象が生起する際の因果関係にかかわる、「つじつまのあった説明」としての「認知的秩序」の水準に区分できるという（井上 1997）。であるならば、＜意味秩序の再構築＞が達成されるためには、両者を再構築できる動機の語彙が必要となる。さらに井上は、認知的秩序のほうがより基本的な水準にあるため、個々人はその再構築にとって適切な動機の語彙を選択・適用するが、そのことは規範的秩序の水準で彼／彼女たちが責任や非難を引き受けざるをえない状況をしばしば惹起³すると指摘している（井上 1997：32-4）。

であるならば、意味ある他者の死により動揺する意味秩序を再構築する営みは、選択可能な動機の語彙いかに——それは恣意的に選択できるものではなく、認知的秩序と規範的秩序双方に対応していることが要求されるので、選択の幅は広くない——によっては、遺族らの自責の念を惹起する、もしくは深刻化させる可能性をはらんでいることになる⁴。

（３）意味秩序再構築のための動機の語彙が招く受苦経験

実際に死別経験、とくに死の責任が迫られる可能性があるそれに直面した場合に認知的秩序の再構築を優先して動機の語彙を選択することは、受苦経験を惹起する、ないしはより深刻なものとするに直結する。長谷正人は「SIDS（乳幼児突然死症候群）家族の会」に言及するなかで、遺族たちは原因や予防法を普及させる活動には概して消極的で、各人の個別的な受苦経験をあくまで個別的なまま共有することに傾斜する、と指摘する（長谷 2000：31-2）。なぜならば啓蒙活動は「乳児の死の責任があたかも母親自身にあるかのような錯覚を社会的に広めてしまう」からである（長谷 2000：32）。ここでの原因を明らかにする知識（動機の語彙）は、何らかの作為／不作為に原因を帰属することで認知的秩序を再構築するはたらきと、遺族ら近親者たちをその作為／不作為にかんする

責任の宛先とすることで規範的秩序を再構築するはたらきを一つのパッケージとして提供している。ゆえに、遺族らがこの動機の語彙を適用して認知的秩序の再構築をはかれば、受苦経験を惹起するかさらに深刻化させるかたちで規範的秩序を再構築することを必然的にもなうことになる。だからこそ遺族らは原因や予防法の普及活動を避けると考えられる。

また前節で紹介した自死遺族の死別経験にかんする諸研究においても、自死遺族の受苦経験をより深刻なものとする理由のひとつとして、自殺は選び取った死であり、またそれは本人や周囲のあり方いかんで予防できたかもしれない、とする常識的知識の存在が指摘されている（副田 2001：204-5；時岡 2003a：122）。本稿の関心に沿えば、その常識的知識とは、原因を確定し認知的秩序の再構築をうながす一方で、遺族を死の責任の宛先とすることで——受苦経験の深刻化をともないながら——規範的秩序の再構築を達成する動機の語彙（の一つ）にほかならない。

以上より、冒頭にかかげた本稿の目的を達成するために、a) 遺族らが言及、適用、または棄却した動機の語彙が認知的秩序の水準でいかなる死の理由／因果関係を提供するのか、b) 規範的秩序の水準で誰／なにを責任の宛先と指定するのか、に着目する必要がある。さらにはc) 動機の語彙の適用による意味秩序の再構築により受苦経験が惹起される可能性、にも着目すべきであろう。むろん可能な限り、動機の語彙がその選択可能性および具体的な内容を媒介として、遺族らによる理由／因果関係の特定と責任の宛先の決定をどのようにコントロールしているかの解明を射程におさめることが望まれる。

3. 調査の概要

本稿で言及するのは、岩手県A町B地区において自殺したCさんの、夫（Dさん）・娘（Eさん）・隣家に住む友人（Fさん）および筆者と彼／彼女らの橋渡し役となったEさんの友人（Gさん。B地区出身）による、死者についての語りである。Dさんは婚養子に入ることにより、Fさんは嫁入りにより、それぞれ20歳代で移住して以来、現在もB地区で生活している。他方EさんとGさんは結婚により他出し、現在は別の地区で生活している。ただし生家やB地区住民との関係は現在でも維持している。

Cさんが生まれ、そして生涯を終えたA町B地区は県庁所在地近郊の農村地帯で、農外就業が比較的容易な立地条件にあるため、世帯数はほとんど減少することなく——少子・高齢化は進行しているが——、現在でも同族団が葬祭および娯楽にかんする互助組織として複数存在し、また地域住民による産直活動も行われている。したがって、血縁・地縁に規定された村落共同体が人々の意味秩序構築に果たす役割は今なお大きい。

Cさんは1921年に農家の一人娘としてB地区に生まれ、Dさんと結婚、1男1女をもうける。1989年に自死。享年67歳⁵。彼女は自死直前の入院以外に集落外での生活経験はなく、1980年代に食品工場に数年間勤務した外は農業以外の職に従事したこともなかった。

筆者は2001年8月に、DさんおよびEさん（二人は同席）への（以後、「インタビュー①」とする）、2002年9月にFさんへの（以後「インタビュー②」とする）聞き取りを座談会形式で行った。いずれのインタビューにもGさんが同席し、語り手として加わっている。内容は録音し、その後文字起こししてある（その内容を本稿で使用することは、四者から了解をいただいている）。それを記述・分析することで、彼／彼女らがいかなる語彙とレトリックを駆使して（ないしは駆使せずに）Cさんの自殺により動揺したであろう意味秩序の修復・再構築を試みたかを解明する。なお、インタビュー内容を引用する場合、方言など分かりにくいと思われる部分には標準語に翻案したものを付してある。

4. 死者の人物像（1）：共同体ないしは意味ある他者にとってマージナルな存在か

亡くなったCさんはいかなる人物として語られているのだろうか。

彼女は同族団が主催する旅行や老人クラブへの参加に消極的で、夫や近隣住民の再三にわたる説得にもかかわらず拒絶の姿勢を崩さなかった。血縁・地縁に規定された共同体との関与には消極的だった。

(引用1：インタビュー①より；筆者がCさんの趣味を尋ねたとき)

D：このへんでほれえ、あの一、〇◇[*業種]さ[稼ぎに]出でるがら、俺が出でるがら、母っちゃんウチで稼ぐんだがら、母っちゃんも同んじように、あの、苦勞してるんだがら、母っちゃんもへでぐべっと、んで二人で何たって旅行に行く事だって、夫婦二人で行くんでしょ、んだがらあんべってそって、絶対え行がねえんだよ。

(当時このあたりでは、毎年冬になると私も含めて男の人の多くが出稼ぎに出ていました。「女の人たちはその間、家を守るために[出稼ぎに出た男の人たちと同様に]苦勞しているんだから、その慰勞もかねて夫婦二人で[同族団が主催する]旅行に行こう」と誘っても、[Cさんは]かたくなに拒否しました)

E：行がねえんだっけねえ、忙しくねくてもそれ、忙しいわけぢゃねえんだよな。

(行かないといっても、都合が悪いとか忙しいというわけでもなかったのですが)

D：んだがら、それ、うん、忙しくねんどもな、行がねんだなす、それ。

(だから、ほら、忙しくないけど、行かなかった。ほら)

【中略】

E：他、他の人たちとあんまり歩き。

(ほかの人たち[=地域の人たち]とあまり[旅行に]行きたがらない)

D：あどあれえ、んだがらほれえ、今度あれ友達に言われるわけだ、おめえ、ほに何で母っちゃんへでがねってよって。

(そのせいで私は同族団の人たちに「なんでおまえは母ちゃん[=Cさん]を旅行に連れてこないんだ」と言われました)

E：やんたんだ。

(嫌なんでしょう)

D：へでがねえでねえ、や、行がねって言う言われだ、まんづお前えだち行ってして見でけろって、したっけ見さ来て、まんついいんだあ、んや、いやいやってたまには行く事もあるっけ。

([そう言われたので私は]「連れて来ないんじゃないくて、[Cさんが]『行かない』と言っている。それならばおめえたちが説得してくれ」と応えました。そうしたら[彼/彼女たちが]来て、「まあそう言わずにまづ行きましょう」と説得すると、たまに参加しました)

(引用2：インタビュー②より；インタビュー①で知った、Cさんが同族団や老人クラブ主催の旅行を忌避したかどうかを確認したとき)

筆：[旅行に]出てか[ない?]、何か嫌がるどかいう風に？

F：うん、んだったよ。あんまり歩がねがった。

(引用3：インタビュー①より；Cさんが老人クラブに加入していたかに話題がおよんで)

D：[Cさんは老人クラブに]入った、入らねがったの先に、入らねえでなす、そしたどごで入れって何にも勧められるっけおんす、すったどごでまんつしたら入えったらいがべぢえって。一回だが、二回だが行って来たんだな。

([Cさんは老人クラブに]結局入会したけれども、入会しないうちはとにかく勧誘されて、それで「[私=Dさん]それなら入会したほうがいい」とアドバイスしました。それで[Cさんも]一回か二回ぐらいは老人クラブの催しに参加しました)

【中略】

D：んだまだ次もへえ行げばいいんだってへってらったってば、そうしてらっけそんな事して死んでしまったえんがら。

(「Dさんがそれならまた次も出かければいいんじゃないの」と言ったのですが、[その後で]自殺してしまっただんです)

Cさんは他方で地区外の他者との接触に関心を示し、出稼ぎ先で負傷した夫の付き添いで他県の病院に赴いたときには、夫を放置して他の付き添い人や通院患者との対話に興じていた。また農協関連の会合（他地区の人たちとも交流がある）に積極的に参加していた。

(引用4：インタビュー①より；Dさんが出稼ぎ先で負傷・入院した際の、入院先に駆けつけたCさんの言動に話題が及んだとき)

E：だって、あれ、うちの父親[=Dさん]なんかもL県で怪我して入院したりしてさ、付き添いに母親[=Cさん]が行ったんだよね、そうせばね、付き添いでないでさ、布巾一枚持って洗うふりしてねえ、どごがどごさ歩いて、誰かとしゃべって、話っこしたがるんだっけ、結局自分はあれえ、自分はあれでねえがら。

(父親[=Dさん]が出稼ぎ先で負傷・入院したときに母親[=Cさん]が付き添いに行きました。でも母は付き添いもせずに、布巾を洗いに行くふりをして、どこかに行って、誰かと話をしていました。自分がケガしたわけでもないの)

【中略】

D：俺ごとほれえ、すっかどなったでなす、こいづひっくり返すのへわだったのす、んで、寝でらのす、したっけ床に居だっで何も話もね、ほら、出張れねじゃ、うん、外さ行っても来ねなあと思っで、んなどごさ行っでったって、あいづだへって、たくさん病院さ来るべ。

(自分はそのとき寝返りもうてず、まともに応答するのもしんどかったんです。そんなときに[Cさんの]声も聞こえなかったんで、「あれ、病室の外に出て戻ってこないなあ。どこに行ったんだろう？どうして戻って来ないんだろう」と思いました。どうやら、[通院患者や他の付き添いの人たちが]たくさん病院に来るので)

E：珍しいがいろいろんな人捕まえてそっちの方行っで。

(通院患者や他の付き添いの人たちを珍しがってその人たちと話して)

D：その人だちさ行っで話すの、話っこすのおもせくて。

(おもしろがって、通院患者や他の付き添いの人たちとおしゃべりして)

(引用6：インタビュー②より；Fさんが筆者に、Cさんの人柄を象徴するあるエピソード——引用7を参照——を語っていたとき)

F：[農協の]婦人部の集まりっこだった。

筆：そういう集まりとかにはよく出てらっしゃったんですか？

F：出で、出だったよお、うん、それごそほれえ、イエに居れば、退屈だがらなはあ。

FさんはCさんのことを、思ったことをそのまま口に出す「面白い人」と評価していた。そればかりか、Cさんは農作業や家事を厭う発言を繰り返し、しかもそれを直接夫[=Dさん]や友人[=Fさんほか]に向けていた、とDさん、Eさん、Fさんは述べる。

(引用7：インタビュー②より；Fさんに、Cさんの人柄を象徴する言動を尋ねたとき)

F：私、記憶にあるなあ、公民館さ[農協の]婦人部で、集まりっこあるわけ。

【中略】

F：[そのときに]「そっちの蜜柑の方大っきいがら、おらさそっちけで」どがさあ。

G：はあ、はっきりなはあ。

F：そう、はっきりど。

G：自分の思ったごどを言うわけだあ、遠慮しねえでなあ。

(引用8：インタビュー①より；Dさんが出稼ぎ前に稲刈りの準備のため一人で毎日夜2時まで働いていたことにな

いする、Cさんの反応に話題がおよんで)

E:うちの母親はほれえ、あだしど一緒でもはあ、あんま稼ぎてぐねんだあ。あん人そだども。楽しみたい方がらさ。力違うんだもん、みなさんで稼ぐ[ようには]。

(母親[=Cさん]は私と一緒に、もうあんまり働きたくない人で。楽しみたいほうで。力からして違うので、他の人のようには仕事が出来なくて)

D:俺の、俺の事もしゃべってらったんだって、なーにおめえそうやって稼んで、おめえなど田の中で死んでるんだ、って、そういう事しゃべったなす。

(妻[=Cさん]は私にたいして、「なに、おまえもそうやって[夜遅くまで]働いて、田んぼの中で死ぬのが本望なんだ」と言いました)

(引用9:インタビュー②より;「Cさんは身内や近隣住民のかげぐちをよくたたく人だったのか?」とFさんに尋ねたとき。Fさんが「Cさんは身内や近隣住民のかげぐちはたたかないが、夫の言動に不満があれば彼に直接言う人だった」と応えた後で)

F:で、[出稼ぎからDさんが]春さ帰って来ればなあ、「お、おらほのおっ父おおつゆ好ぎで。煮だの。んだがらな、俺だばおつゆねくていいどもお、おっ父おあ、おつゆ食うったえんに」[とCさんは言いました]。

(それで[出稼ぎから夫=Dさんが]春になって帰ってくる頃になると、「うちの夫は味噌汁が好きで。自分なら味噌汁はなくてもいいけど、夫が食べるので[つくらなければならない]」[とCさんは言いました])

G:うん。

F:「煮るにへわだ [=煮るのは面倒くさい]」っと [Cさんは私に言っていました]。

G:へわだっとお。ははははっ [*笑う]。

【中略】

F:ほんでも、まんつ普通だば他の人さ聞かせねえんだどもなあ。すぐ言うの、うん。

Cさんは共同体へのコミットメントを厭い、外部とのコミットメントを希求していた。そればかりか、自らの不満や要望を直接他者につけ、農作業や家事労働の忌避を表明するといった、共同体内部で嘲笑・かげぐち等のサンクションの対象になりかねない言動を繰り返していた。彼女の言動は、意味ある他者としてのDさん、Eさん、Fさんの意味秩序における「諸々の行為の指針として作用し」「ある特定の処理法に指示されている通りに事を進めている人は誰でも、それに相関している結果を意図しているものと[他から]想像される」ものとしての「いままでどおりの考え」(Schutz 1976=1991:138)からは逸脱している。であるならばCさんは、意味ある他者たちにとって、常識知を共有せず、意味秩序の共同構築とも無関係な存在であったのだろうか。

5. Cさんの人物像(2):まなごしの感受、病苦、労働能力の喪失、経済的困窮への懸念

しかしながら、意味ある他者たちにとっての自明な「いままでどおりの考え」からの逸脱は、それに対する無知や不服従とは限らない。Cさんは以下の語りでも明らかなように、周囲の(具体的な誰かではない)〈まなごし〉——G. H. ミードの言う「一般化された他者」⁶の審級としての——に敏感に反応する存在であった。

Fさんによれば、食品工場における働き手としての能力の低さを恥じていた。Eさんによれば、入院を地域の人たちに隠しておきたいがために、保証人は他出した娘(=Eさん)に依頼した。また入院したCさんはお盆の一時帰宅を渋ったという。その理由をEさんは、労働能力低下と医療費支出の増加を恥じていたがために、まなごしに敏感になっていたためだと述べる。さらにEさんとGさんは、母親役割の喪失を、まなごしから身を守る鎧——その役割を履行している限りにおいて、たとえ病による労働能力の低下や医療費支出増加に直面しても自らの存在意義を否定する必要はない——の喪失と述べることで、彼女のまなごしへの敏感さを説明した。いずれにせよ、Cさんが彼/彼女ら意味ある他者と常識知を共有し、意味秩序を共同構築していたからこそ、そのような反応が生じうるのだ。

(引用10：インタビュー②より；Cさんの食品工場での働きぶりを尋ねたとき。仕事内容は、焼き鳥用の鶏肉を串に刺すことである)

F：[*手で位置を示しながら] ここさ [串に刺した焼き鳥が] 盛りっこになるえんよ、お前えはんの所も盛りっこ。

(このあたりに [串に刺した焼き鳥が] 積み上がっていきます。たとえばあなたのところもこんな感じで)

【中略】

F：してなはあ、刺せねえで、あの一、「げんだ」ってなあへうつけ、やっぱり。

(それで、刺せなくて、あの、[Cさんは]「申し訳ない」と言いました。やっぱり)

G：はあー、やっぱり、うん。

(引用11：インタビュー①より；入院したCさんがお盆の一時帰宅を嫌がったこと、医療費負担を気にしていたことが話題になり)

E：したっけ家さ帰るとほら、近所の眼があるから、それも嫌だったんじゃねがな。生きででもは、あれ、あれだ、なんて言ったったかな、なんか生きででもはあ稼げねえし金ばりかがるし、まだ六十なんぼだったからね、医療費もかがるわけだね、あの当時は。なんぼだったけ、2週間でなんぼだったかなあ、15万くらいあったったかなあ。まあそれでもあの保険から戻って来るらしかったあの当時もね。

【中略】

D：んだ、んだがらほれ、金かからんず、「なあに金なんぞ心配すなずな、なあになんちな事聞いてんだがな、そんなごどは心配さねくていいんだがらまづ行ってろ」って言ってやったのんだどもな。

(だからそれで [Cさんは] 金がかかると思っていたみたいなんです、[私は]「なに金のことは心配するな。何を聞いてるか知らないが、そんなことは心配する必要はないんだがらまづ入院してろ」と言ったのですが)

E：なんぼそう言ってもね、結局その人のね。

(いくらそう言っても、結局その人の [思い込みがあれば] ね)

D：しゃべったってあがねえんだ。

(話しても無駄でしょう)

【中略】

G：だけど、は、自分でほら駄目だあと思っでるから人からも聞く気ないえんし。

E：そしてそれも随分あるし結局周りの眼もすんごくあれえ。

G：気にしたんだべねえ。

E：なんだべねえ。

G：だってあの頃だって□■[*病名]はずっといっぱいあったんだよ。

(引用12：インタビュー①より；Cさんが□■[*病名]であることを周囲に対し隠そうとしていたことに話題が及び)

筆：自分の病気とかは、たとえば□■以外の病気だったとしても [死にたくなるくらい苦しめて] 隠そうとしたんでしょうか？

E：うーんと、若い時も手術したよね、▲▽[*病名]かなんかやって。

D：手術もしたごどもある、あるども。

E：あの頃まだそんなでながったんだけど。

D：そんなでねがったんだな。

【中略】

G：そういう感じの人でねがったよなーと思っでさ。おらがらさあ、なんとなくおらがらさあ冗談も語ったりするような感じの人だったんだよ、ほらただ自分の□■つつ病気に対してはほんとに、それで殻に。

(そんな人ではないと思っていたのですが。自分から冗談を言う感じの人だったはず。ただ、自分の病

気を本当に気にして自分の殻に閉じこもったのでは)

D: うん、それだけすって。

E: 若い時は、あれ何歳だべちゃ、▲▽やったのは。私も小さかったから、子供も小さいからねえ、死んでられないんだもんねえ。年取って来たらもう子供も大きいし。

G: お金もかかるし、仕事も出来ねえし、どうせ俺なんかいらねえみてえな感じになって来たんだねえんかな。

E: うーん、そうだったんだがねえ。若い時はねえ、考えなかったんだろけども。子供もおがって [=育って] 来たんだがらもう [死ぬことなんて] 考えでられねえんだもんね。

G: もうは、あのどぎ [=子どもたちが独立した後] になれば二人だけだから、旦那さんと自分だけだえんがら。

E: んだがら、[Cさんは] どういう性格だったんだべがな。

D: 俺もまだ[病院に]行っって付いてればえがったえんども、なんちでそのくれえな病気でもねがった。

(引用13: インタビュー①より; なぜCさんは入院時の保証人をEさんに依頼したのかについて話題が及んだとき)

E: んでねぐ、私は嫁行ったのなんだ、結局周りさ聞こえるのがやだがら、うん。

(そうじゃなくて、[Cさんが私に保証人を頼んだのは] 私が嫁に行った人間だから。[夫や他の親戚に頼めば] 近隣に入院が知られてしまうので、それが嫌だったと)

G: 周りさ聞こえでしまうがら。

E: 内緒にしときたいんだし。内緒にしたったってかねえ。

(内緒にしておきたかったんでしょ。でもいくら内緒にしても)

【中略】

G: みんなしてなは、田舎なんかとくにほら、「はああの人居ねえねっけどごさ行ったべ」どがすぐ気になるがらさ。

【中略】

D: いずれ□■ [*病名] 大変だったんだ。

そしてCさんは晩年、病苦等による身体のままならなさを嘆く発言を繰り返していた。

(引用14: インタビュー①より; Cさんが農作業の辛さと身体のままならなさを嘆いていたことが話題になり)

D: あのあたりもほれえ、硬くなつてがらなす、柱掛げだのよお。そしてはあ、「おらやんたあ、おらやんたぐなつた」ってしゃべけつてすつたべ、「ああやんたがんべ行つて夕飯さねがあ」って言つてよごしたんだあ。したつけばあ「ご飯だ」ってさかびに来て田さ行つて、はあ、だば行つてご飯食うべ、行つて来てがんす、「おらは出張のやんた」って言うで「はあ、でやんたら、後始末しに行つて寝ろ」ってへつてるのす。

(その頃も、[水田の地面が] 硬くなってから乾燥用の柱を設置して稲を掛けてました。そうしたら [Cさんが] 「もう嫌だ、仕事をしたくない」と言うので、[私は] 「疲れたなら家に帰つて夕飯の支度をしてくれ」と言つて帰しました。そうしたらすぐに田んぼに戻つて来て「ご飯が出来た」と言いました。それならご飯を食べようと戻つて [ご飯を食べていたら]、[Cさんが] 「もう今日は働きたくない」と言うので、[私は] 「それなら食事の後片付けをしたら寝てろ」と言いました)

E: ゆるぐながつたんな、あれえやっぱりね。

(しんどかつたんでしょ。やっぱり病気が)

【中略】

E: [*ニンニク栽培もしていたという話になり] そしてやつてたら「こいつだばはあやあはあゆるぐねがらはこつたなのいい」って言つて「別に、お粥食つて、お粥食つてでもいいがら、もっとこの難儀したくない」って言う、言つてるの。

(そうして [そんな状況でニンニク栽培も] していたら、[Cさんは] 「もうこんなのはしんどい。こんなことはしたくない」「[貧乏になつて] お粥しか食べられなくなつても、こんな辛い仕事はしたくない」と言つて

いました)

(引用15：インタビュー②より；Cさんが病やそれが惹起する経済的困窮・労働能力の喪失への不安のため「死にたい」と漏らしたことがあったという話になり)

F：んで聞いてだったあ。してそれでもなはあ、ああいうに生まれで来てる人なんだが、ずったり、「死にてえー、死にてえー」って家でもへったつづおんなはあ。

(それでも、そういう星の下に生まれてきた人なのか、いつも「死にたい、死にたい」って言っていた、と聞いています)

G：はあー。

F：お父さん [=Dさん] へったつづあ。

G：ほおー、はあはあはあはあ。

F：うん、「家でもへったつづあ、『なに、バカ話してえ』、ってへってなはあ、がりがりど医者さやったつづあ。

(それで [Dさんは] 「[Cさんが] 家でもそんなことを言うので、『なにバカなことを言ってるんだ』と厳しく言って入院させた」と言っていました)

Cさんは晩年、病とそれによる身体のままならなさ、それが惹起する経済的困窮・労働能力の喪失への不安を苦しめていた。そして周囲のまなざしに敏感に反応していた。このCさんの人物像は、Dさん、Eさん、Fさん、Gさんの四者により共有されている。またEさんとFさんは、母親役割の喪失にも言及している。彼／彼女らが適用可能なものとしてそれらの動機の語彙を想定しているということだ。であるならば四者ともまなざし、病苦、労働能力の喪失や経済的困窮への不安といった他者に受容されやすい動機の語彙——EさんとFさんはさらに役割喪失——を適用し、Cさんの自殺を<選び取った死=共同構築した意味秩序の拒否>ではなくそれらの動機にもとづく<不可避の死>と定義することで、意味秩序を修復・再構築——原因と責任の宛先を特定——することが可能となるはずである。では、彼／彼女たちはいかなる動機の語彙を適用した／しなかったのだろうか。

6. 「動機の語彙」の適用と、それにたいする抵抗

Cさんがかつて生きていた血縁・地縁に規定された共同体的紐帯の外部で生きるEさんおよびGさんは、そのような紐帯に対する否定的ともとれる発言が散見された（→引用11, 13）⁷。そして彼女たちは、病苦がもたらす経済的困窮と労働能力の喪失や役割喪失も、共同体的紐帯およびそのまなざしが存在しなければ気にする必要のない程度のものだと主張する（→引用11, 12, 13）。彼女たちは、自ら命を絶ったCさんの生きた秩序内では大きな意味をもっていた共同体的紐帯とそのまなざしを動機の語彙として採用することで、自殺を不可避とする原因（動機）と責任の宛先を確定している。すなわち、共同体的紐帯にCさんの自殺の原因を求め、またそれを責任の宛先とすることで、死者、自身、近親者、ないしはCさんの生きていた共同体内部の特定の人々に責任を帰属させることなく、Cさんの死を理解可能なものとして意味秩序の内部に位置づけているのだ。

他方その共同体的紐帯のただなかでいまも生きるDさんとFさんは、EさんやGさんのように共同体的紐帯とそのまなざしを動機の語彙として採用しなかった。そればかりか、病苦がもたらす経済的困窮と労働能力の喪失という動機の語彙も採用しなかった。彼／彼女が試みたのは、言及した動機の語彙をことごとく棄却し、Dさん、共同体、ないしは（Cさんもふくめた）その内部の特定個人にたいする自殺の原因および責任の帰属を回避することであった。

Fさんは、Cさんが同族団主催の旅行や老人クラブへの参加を渋ったのは「牛飼ってらったんだし」「泊まりがけでは[出かけられなかった]」ためであり、また食品工場での遅い仕事ぶりも「[給与は各人]一本なんぼ」なのでほかの人の迷惑にはならないと述べた（インタビュー②）。この語りによって、彼女は共同体的紐帯およびそのまなざしをCさんの自殺の動機の語彙として適用することを棄却している。また彼女は共同体的紐帯への帰責を避けるために、Cさんの病苦による身体のままならなさに言及した。だが彼女は最終的に「分らないよお、そのごどお[自殺と

の関係は]」と述べ（インタビュー②）、動機の語彙として適用することを避けた。さらに夫であるDさんが病苦を訴えるCさんに入院を勧めたことに言及し（→引用15）、Dさんが夫として妻を守る役割を果たしていたこと、そしてそれが可能な程度の経済的余裕があったことを強調する。このようにしてFさんは、Cさんの自殺を理解可能とする動機の語彙をすべて棄却することにより、共同体やDさんら——意味ある他者——にCさんの自殺の責任が帰属されることを回避しようとした。したがって、Fさんにとっての認知的秩序の水準における自殺の意味は、宙づりすなわち理解不能のままである。そしてそのことは、規範的秩序の水準での責任の宛先も確定されないこととイコールである。

Fさんと同じようにDさんも、言及した動機の語彙を棄却し、Eさん、共同体、もしくはその内部の特定個人にCさんの自殺の原因が帰属させられることを回避しようとした。同族団が主催する旅行への参加や老人クラブへの加入を渋るCさんを自らや近隣住民が再三にわたり説得したことは、あくまでCさんを気遣ったことだと意味づけ（→引用1）、自身や共同体を自殺の原因および責任の宛先とすることを回避した。また病苦やそれによる経済的負担を動機の語彙とすることも斥けた（→引用11、12）。さらにEさんの「うん、私もさ、何回も仕事の帰りに[Cさんの入院先に]寄ったりしてらったのさね」（インタビュー①）という語りを追認することで、娘であるEさんが必要な情緒的サポートを行っていたことを確認し、彼女を自殺の原因および責任の宛先とすることも回避した。したがってDさんにとっても、認知的秩序の水準における自殺の意味は、宙づりすなわち理解不能のまま、規範的秩序の水準での責任の宛先も確定されないことになる。

DさんとFさんは、動機の語彙を適用して意味秩序の再構築を試みようとはしなかった。それは、＜意味にとらわれた存在としての人間＞を前提とする立場からすれば、わけのわからなさから解放されることがないゆえに、苦痛に満ちた選択であるようにも思われる。最後に、そのような各自の選択により彼／彼女たちが達成しようとしたものはなにかを、四者が共通して言及しながら棄却した動機の語彙を手がかりに考えてみたい。

おわりに——＜利他＞として自死を語ることへの抵抗と、その困難——

Dさん（夫）、Eさん（娘）、Fさん（友人）、Gさん（Eさんの友人／かつての隣人）の四者は一致して、病苦やそれが惹起する経済的困窮・労働能力の喪失への不安をCさんの自殺を説明する動機の語彙として採用していない。このような、他者とくに家族員にたいして＜（肉体的・情緒的な）ケアの負担を及ぼすこと＞＜労働をつうじて貢献することの困難さ＞＜経済的負担を強いること＞への不安や罪障感（といった語彙）⁸は、自殺、とくに農村部におけるその背景要因のひとつとして指摘されている（松本 1995; 佐々木 2002）。それはすなわち、他者、とくに家族員へ負担を及ぼすことの回避という動機の語彙が、ドミナントなものとして流通していることを意味する。しかもそれは——言動を統制するはたらきを有する動機の語彙であるので——他者、とくに家族員に、そういった不安や罪障感を抱かせることのない関係性を構築する義務も付与し⁹、死を防ぐことのできなかつた者たちの責任を問うものでもある。このような、利他として自殺を語らしめ、そして家族員ら近親者に際限のない負担や義務を課し、あまつさえ受苦経験を与えることを欲望する動機の語彙の適用を、四者とも回避ないしは拒否したのである。それは＜社会＞にたいする抵抗であるとも言える。

しかしながらその抵抗は、現状では困難をともしなわざるを得ない。たしかにEさん（娘）とGさん（Eさんの友人・かつての隣人）は、共同体的紐帯とそのまなざしという別様な動機の語彙を適用することにより、利他としてCさんの死を語ることなく意味秩序の再構築を達成することができた。だがそれは、彼女たちにとっての意味ある他者であるDさんやFさんの存立基盤であるものを責任の宛先とすることでもある。

そして彼女たちのように共同体的紐帯を動機の語彙として適用しなかったDさん（夫）とFさん（友人）は、さらに別様な動機の語彙を適用することができず、利他としてCさんの死を語ることの回避ないしは拒否と引き替えに、Cさんの死によりゆらいだ意味秩序の再構築そのものを放棄せざるをえなかった。彼／彼女は、Cさんの死にかんする＜わけのわからなさ＞をかかえて生きねばならない。それが、彼／彼女による抵抗の代償である。

近親者の自殺によりゆらぐ意味秩序を再構築するためのドミナントな動機の語彙を拒否することは、このようにながしかの＜痛み＞をともしなう。その動機の語彙は、そのような痛みを梃子として、人々を特定の言動へと誘導

し、ときに受苦経験を強いる。その呪縛から解放される〈技法〉の探求が、今後の課題となる。

註

- 1 それには死者、マスメディア上の人物、架空の人物、ペットも含まれる。さらには「不信や敵対、猜疑、憎悪といった負の関係」（渡邊、2002）にある他者も含まれる。それらは今生きている家族員、友人知人、仕事仲間等等等価である。
- 2 大村英昭は近年における社会学界の動向を「自殺データは社会学者にとって恰好の研究資料だったはずなのに、残念ながら、我が国の近年の実情に即したそれらしい研究は、いまだに見あたらない」（大村 2002：133）と批判している。
- 3 認知的秩序と規範的秩序が密接不可分であるため、意味秩序を再構築する動機の語彙は、両者を同時に再構築するはたらきをもたねばならず、前者と後者に異なった動機の語彙を付与することは考えにくい。だからこそ動機の語彙は人々の言動を統制するはたらきを有し（例：自殺の原因をうつ病と特定することは、家族にたいしてそのサインを発見し精神科受診につなげる義務を課す）、それゆえの受苦経験（例：自殺の原因をうつ病と特定することは、そのサインに気づかず精神科受診につなぐことのなかった家族に、自殺を抑止できなかった責任を求めるところを導く）をもたらす。
- 4 意味秩序が再構築される／されないことと、遺族らが（自責の念などの）受苦経験から解放される／されないこととは異なる水準にあるので、分析上区別して論ずる必要がある。
- 5 Cさんの死からインタビューまでに12年、さらにそれから本稿の執筆まで5年以上経過している。その間に遺族らによる死の意味づけが変容している可能性は高い。ただし本稿の目的はあくまである特定時点における「意味ある他者の自殺により動揺する意味秩序を、遺族らがさまざまな動機の語彙を駆使して／しないで修復・は再構築する／しない〈技法〉の一端を解明すること」であり、死の意味づけの変容過程の記述・分析は、本稿で扱おうる範囲を越えることになる。それは今後の課題としたい。
- 6 ミードは、自己批判・自己コントロールとは一般化された他者を媒介とした社会的批判・社会的コントロールにほかならない、と指摘している（Mead 1934=1973：267-74）。
- 7 上野千鶴子によれば、共同体的紐帯にたいする否定的な感情は、中高年既婚女性に広く共有されたものだという（上野 1994：281-301）。
- 8 利他（心）により死の選択を正当化するレトリックは、自殺にのみ適用されているわけではない。それは安楽死・尊厳死の正当化にも重要な役割を果たしている（立岩 2005：29-30）。自殺を正当化するレトリックと安楽死・尊厳死を正当化するレトリックとの共振関係を検討する必要があるだろう。
- 9 松本寿昭は「意志がいつも通じ合い、互いの気持ちや要求がともに生かされるような家族関係」および「家族内でともに考え、相談し、協力していける態勢」を構築することでそのような不安や罪障感（＝「孤独な魂」）を解消することは可能であると述べ、このような義務の履行を家族員らに求めている（松本 1995：545-8）。

（本稿は、第79回日本社会学会大会における報告「近親者の自殺と意味秩序修復の技法」[2006/10/28：於立命館大学]に大幅に加筆修正を加えて作成したものである）

文献

- 浅利宙、2004、「遺族にとっての『家族』の意味変容——社会集団における語りからの分析——」『家族社会学研究』15(2)：77-88。
- Berger, P. L, 1967, *The Sacred Canopy : Elements of a Sociological Theory of Religion*, New York : Doubleday & Co. (= 藪田稔訳、1979、『聖なる天蓋——神聖世界の社会学——』新曜社)。
- Gerth, H. H. & C. W. Mills, 1953, *Character and Social Structure : the Psychology of Social Institutions*, Harcourt : Brace & World Inc. (= 古城利明・杉森創吉訳、1970、『性格と社会構造——社会制度の心理学——』青木書店)。
- 長谷正人、2000、「セルフヘルプグループの調査実習から——『個別的な苦しみ』をめぐる社会学の可能性——」大村英昭編『臨床社会学を学ぶ人のために』世界思想社、24-46。
- 井上俊、1997、「動機と物語」井上俊ほか編『岩波講座現代社会学 1 現代社会の社会学』岩波書店。
- 松本寿昭、1995、『老年期の自殺に関する実証的研究』多賀出版。
- Mead, G. H, 1934, *Mind, Self, and Society: from the Standpoint of a Social Behaviorist*, Chicago : The University of Chicago Press. (= 稲葉三千男ほか訳、1973、『精神・自我・社会』青木書店)。
- Mills, C. W, 1963, *Power, Politics, and People*, Oxford, London & New York : Oxford University Press. (= 青井和夫・本間康平監訳、1971、『権力・政治・民衆』みすず書房)。
- 水津嘉克、2001、「『死別』と『悲嘆』の臨床社会学」野口裕二・大村英昭編『臨床社会学の実践』有斐閣、197-222。
- 大村英昭、2002、「臨床社会学、事始め——喪失（ロス）の痛みと鎮めの文化装置——」『現代のエスプリ422 社会的現象と臨床』至文堂、

128-37。

佐々木交賢、2003、「高齢者の自殺と生きがい——秋田県と沖縄県の高齢自殺者の分析を通して日本の高齢自殺者の現状を展望する——」

佐々木交賢 / ピエール・アンサー編『高齢社会と生活の質——フランスと日本の比較から——』専修大学出版局、181-97。

Schutz, A, 1976, *Collected Papers II : Studies in Social Theory*, The Hague : Martinus Nijhoff. (= 渡部光ほか訳、1991、『アルフレッド・シュッツ著作集第3巻 社会理論の研究』マルジュ社)。

副田義也、2001、「自死遺族について」副田義也編『死の社会学』岩波書店、195-210。

鷹田佳典、2003、「死別と自己物語の再構築」『年報社会学論集』16 : 175-86。

立岩真也、2005、「他者を思う自然で私の一存の死」『思想』岩波書店、976 : 23-44。

時岡新、2003a、「言わないという不快、話せるという安堵——遺児の語りあう経験から——」『社会学ジャーナル』28 : 113-24。

時岡新、2003b、「故人をめぐる対話——子どもたちによる“分かちあいの会”のばあい——」『年報筑波社会学』15 : 82-93。

上野千鶴子、1994、『近代家族の成立と終焉』岩波書店。

渡邊太、2002、「ネットワークにおける負の関係の機能」『年報人間科学』23 : 193-211。

Suicide, Reconstruction of Meaningful Order, and Vocabularies of Motive

FUJIWARA Nobuyuki

Abstract :

When a suicide occurs, the meaningful order of the intimate persons of the suicide victim is unsettled. Therefore, the intimate persons have to reconstruct their meaningful order by using vocabularies of motive. This study aims to elucidate which vocabularies the intimate persons of suicide victims choose, focusing on a suicide case in Iwate Prefecture.

The easiest way of reconstructing a meaningful order after it has been unsettled is to apply dominant vocabularies of motives. However this way is painful for intimate persons of suicide victims because the dominant vocabularies of motives tend not only to reveal the causes of the suicide but also to give intimate persons responsibility for causing the suicide.

In the case in this study, the intimate persons indicated that the suicide victim worried about the decline of her working ability due to an illness and about giving an economic burden to her household. These are the dominant vocabularies of motives they did not choose these. The daughter of the suicide victim and the daughter's friend chose community ties and their regulation as a way of reconstructing their meaningful order, though they decided that their country was the cause of the suicide. The husband of the suicide victim and her friend chose no vocabularies of motive: hence they abandoned reconstructing their meaningful order. They resisted using dominant vocabularies of motive, although their resistance must have been painful.

Key words : Suicide, Intimate persons of Suicide Victims, Meaningful Order, Vocabularies of Motive